

広島大学

令和 7 年度 広島大学光り輝き入試

総合型選抜Ⅱ型

解答例又は出題の意図等

文学部 人文学科

地理学・考古学・文化財学コース

地理学

科目名：小論文

解答の公表に当たって、一義的な解答が示せない記述式の問題等については、「出題の意図又は複数の若しくは標準的な解答例等」を公表することとしています。

また、記述式の問題以外の問題についても、標準的な解答例として正答の一つを示している場合があります。

令和7年度 広島大学光り輝き入試総合型選抜（Ⅱ型）
文学部人文学科 小論文問題 解答例又は出題の意図等

分野

地理学

問

<解答例>

まず、日本の農村をめぐって 1970 年代から盛んとなったのが、地方交付税や補助金に依存するなど、経済的に脆弱^{ぜいじやく}な立場にある農村や農業を否定する農業不要論である。こうした論調は、2000 年代に入ると農村居住を否定する^{著作権保護の観点から、公表していません。}に発展し、それは 2014 年に総務省報告に端を発する地方消滅論によって、一層促進されることとなった。この農山村たたみ論と呼ばれる一連の立場は、選択と集中という考え方にもとづき都市部に人口や投資を集中させる一方、過疎化が進んで経済的に弱い立場にある農村部を切り捨てようとする考えが根底にある点に最大の特徴がある。

それに対して、農村を否定するのではなく、有効な方法によって農村振興を図るべきであるとする研究も多い。その争点となったのは、農村振興が外来型で行われるべきか、それとも内発型で行われるべきかという議論である。まず前者は^{著作権保護の観点から、公表していません。}と呼ばれ、主に政府の公共投資（地方交付税や公共事業）によって農村所得の向上を図り、さらに農村部への工場誘致によって雇用創出を進めるべきであるとする立場である。この外来型発展論の最大の特徴は、農村経済が地域外部（都市部など）の資本や企業に依存するため、農村の発展が地域外部の経済状況によって大きく左右されるという点にある。その結果、1980 年代以降の地方圏や農村部では、苦勞して誘致した工場が海外移転したり、バブル経済の崩壊によってリゾート地が衰退するなどの問題が顕在化することとなった。

そうしたバブル経済の崩壊後、外来型発展論の反省に立って、1990 年代後半から日本の農村では地域づくりの動きが活発化していく。その特徴としては、まず内発性にもとづいた地域発展であるという点があげられる。資金も意思も地域外部から投入される外来型発展論とは異なり、住民自らの意思で地域内の資源を活用して地域振興を行うという方式が重視されるようになった。また、この地域づくりの特徴として総合性・多様性も見逃せない。すなわち外来型発展論では、とかく経済振興が重視されがちであったが、そうした単一目的ではなく、文化・福祉・景観も含めた総合性が重視されるようになった。なぜなら、そのような総合性を重視することで、地域の特性に応じた多様な発展方式を生み出すことが可能になるからである。このような一連の立場は^{著作権保護の観点から、公表していません。}と呼ばれ、1990 年代以降、日本の農村のあるべき発展方式として注目されるようになった。

しかし 2000 年代以降、日本では過疎化や人口減少が一層深刻化しており、多くの農村では、地域内の人材や資源のみを活用して地域振興を図ることが難しい状況にある。そこで近年、地域外部の人材や資源を積極的に活用し、地域振興を進めるという^{著作権保護の観点から、公表していません。}という考え方が台頭している。この新しい内発的発展論の特徴は、農村が地域外部の企業や都市住民などと積極的に連携し、地域の価値を高めようとする点にある。上述した（一般的）内発的発展論は、農山村の内発性や自立性を重視していたが、この新しい内発的発展論は、積極的に地域外部のアクターと連携を取りながら、農村の維持・発展を図るべきという考え方であり、日本の農村振興方策が新たな段階に入りつつあることを示唆している。(1,351 字)